

島原城下絵図翻刻稿（9） 「島原城廻之絵図」

西田，博

<https://hdl.handle.net/2324/4485646>

出版情報：pp.1-44, 2021-08-16
バージョン：
権利関係：

島原城下絵図翻刻稿⑨

「島原城廻之絵図」

目 次

1. 基本データ	2
2. 文献にみる「島原城廻之絵図」	4
3. 例言	5
4. 「島原城廻之絵図」翻刻	6
5. 写真図版	17
6. 語註	27
7. 解説	32
I. 景観年代	
II. 色分目録	
III. 作成年代	
IV. 作成の主体	
V. 伝世	
VI. 料紙の欠損	
VII. 北西部の地理描写	
VIII. 萩原村について	
IX. 地名「六ツ木」について	
8. 参考文献・史料・URL	42
9. あとがき	44
コラム「浜ノ古城」	16

1. 基本データ

◀熊本県立図書館データ 1▶ 【註1】

- 【タイトル】 肥前国嶋原城内外の絵図 (嶋原城廻之絵図) [古地図]
 - 【叢書名】 肥後藩絵図
 - 【叢書名巻次】 352
 - 【ページ】 1枚
 - 【請求記号】 ㊦I/352
 - 【内容紹介】 原図寸法：224×184cm 作成年不明 【註2】
 - 【画像リンク】 <http://www.library.pref.kumamoto.jp/DigitalArchives/ezu/higohanezu/Takoku/chie352.pdf>
 - 【資料区分】 特別郷土
-

◀熊本県立図書館データ 2▶ 【註3】

- 【所蔵館】 県図
 - 【所蔵場所】 郷特別収
 - 【請求記号】 /㊦I/352/〔特〕
 - 【資料コード】 0119360477
 - 【資料区分】 絵図原本
 - 【帯出区分】 貴重資料
 - 【状態】 在庫
-

◀熊本県古地図目録データ▶ 【註4】

- 【大分類】 前篇 肥後藩絵図目録
 - 【小分類】 17. 他国の絵図
 - 【大分類内の通番】 352
 - 【圭室諦成による仮題】 肥前国嶋原城内外の絵図
 - 【絵図に附せられた原題】 嶋原城廻之絵図 【註5】
 - 【図の大きさ】 縦224×横184cm
-

《その他のデータ》

- 【所蔵機関】 熊本県立図書館（熊本県熊本市中央区出水2丁目5番1号）
- 【内 題】 なし
- 【外 題】 島原城廻之絵図
- 【史料名読み】 記載なし。「しまばらじょうまわりのえず」か。 【註6】
- 【ラベル】 ①「17/352/ 」 ②「肥前」（図13参照）
- 【形態】 折図
- 【大きさ】 28x46cm（折畳時）
- 【景観年代】 記載なし。寛文9(1669)年以降、かつ寛文9年頃と推定される（後述）。
- 【作成年代】 記載なし。寛文9(1669)年以降、延宝2(1674)年以前と推定される（後述）
- 【作成者】 記載なし。島原藩以外の藩または幕府の一機関か（後述）。
-

- 【註1】 https://www2.library.pref.kumamoto.jp/index.php?key=muejeqsxz-912&search=1#_912。
- 【註2】 原図寸法は展開時のもの。
- 【註3】 <https://www.library.pref.kumamoto.jp/winj/opac/switch-detail.do;jsessionid=CF7849444967EDA1BCE2FE8D34D1C62E?idx=1>。
- 【註4】 郷土文化研究所(1954) 3, 4, 7, 21, 22 頁。
- 【註5】 凡例(郷土文化研究所 1954, 3 頁)には、原題を「()の中に入れた」とあるが、実際には「[島原城廻之絵図]」と記されている。
- 【註6】 鍋島報効会は「佐賀城廻之絵図」の読みを「さがじょうまわりのえず」とする。

2. 文献にみる「島原城廻之絵図」

「島原城廻之絵図」はこれまで様々な文献に取り上げられてきた。鮮やかな色彩、精緻な筆致ゆえに見た目にも美しく、また多くの文字情報が記されるからであろう。ここでは「島原城廻之絵図」の関連文献をいくつか紹介したい。

「島原城廻之絵図」を載録する史料目録が初めて世に出たのは、恐らく 1952 年のことで、『スクール・ライブラリー』誌に発表されたものである。これが好評だったのでであろう、わずか 2 年後には続編を加えた『熊本県古地図目録』が刊行されている（郷土文化研究所 1954）。

それから 30 年の時を経て、絵図全体の三分の一ほどを収めるモノクロ写真が『図説 日本城郭史』に掲載され、その解題の中で、「島原城絵図の現存するものでは、もっともすぐれた絵図である」と紹介された（日本城郭協会 1984）。さらに 2005 年刊の『よみがえる日本の城 21』には鮮明な本丸・二ノ丸のカラー写真が掲載され、城郭史研究に寄与することになる（学習研究社 2005）。

翻って研究史を繙くと、初めて本格的に景観年代を考察したのは平尾明氏である。平尾氏は膨大な数の島原大変関連絵図を整理、その成果を『島原市保有寛政四年島原大変関連古図集』にまとめたが、その中で「島原城廻之絵図」についても考察を加え、描画情報・文字情報の分析から、景観年代を松平忠房時代(1669-1698)と推定、さらに「島原地方の製作ではない」と明言した（平尾 1997）。

次いで宇土智恵氏は、著書『島原城の復元的研究』のなかで、「元となった絵図はおそらく島原で作られた」との見方を明らかにし、その絵図が正保城絵図の系統図である可能性に言及した（宇土 2006-07）。2009 年には、「島原城廻之絵図」に基づく城下町復元図（全体および鉄砲町部分）および論考が宮本雅明氏によって発表され、都市史研究上の価値が再認識されている（島原市教育委員会 2009）。

そして現在、島原城天守閣内には「島原城廻之絵図」の特大写真パネルがあり、来訪者の目を引く。このようなパネル展示もまた、史料紹介の一形態であり、地域史研究に大きく貢献しているといえよう。本書執筆の動機もまさにこのパネル展示だったのである。

3. 例言

1) 以下の記号を用いた。

[] 料紙が欠損し、文字の推定ができないもの。

[高] 料紙が欠損しているが、残画・他の箇所・他の史料によって文字の推定が可能なもの。

2) 字体は、一般に用いられるものに改めた。

例) 嶋→島

嶽→岳

ア→部

3) 宣命書きは全て全角で表した。

例) 江・ニ・ノ→江・ニ・ノ

4) 「兵へ」(兵衛)は、そのまま「兵へ」とした。

5) 明らかな誤記・誤写・誤謬は、そのまま翻刻した上で、「6. 語註」あるいは、「表2」の「資料A～Iにおける記載(△の場合など)」の欄で注記した。

6) 翻刻図・写真図版では、北方向を矢印で示した。例)【北↑】【北↓】

4. 「島原城廻之絵図」翻刻

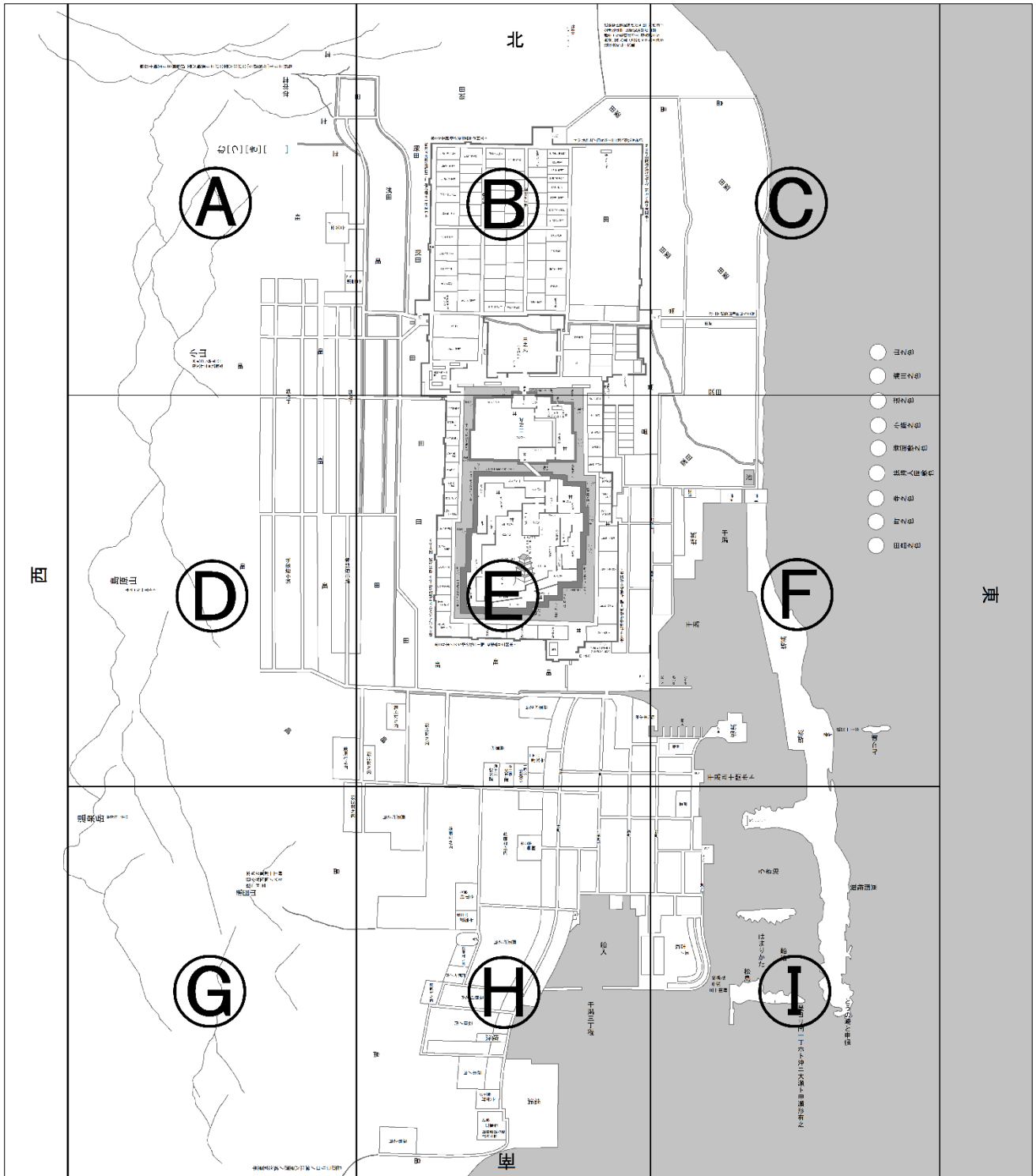


图 1 翻刻分割图 索引 【北↑】

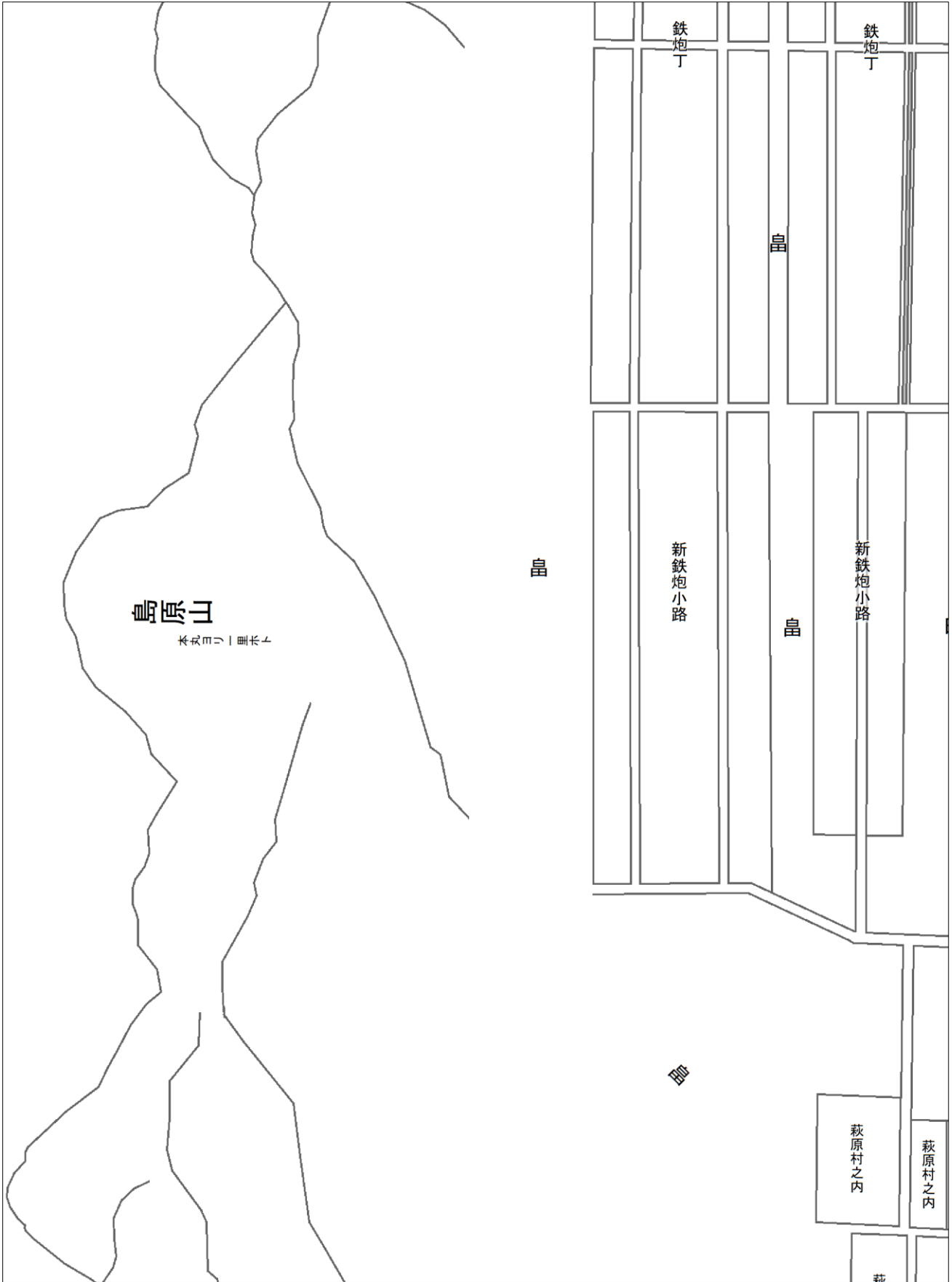


図5 翻刻分割図 ㊦ (索引図⇒図1) 【北↑】

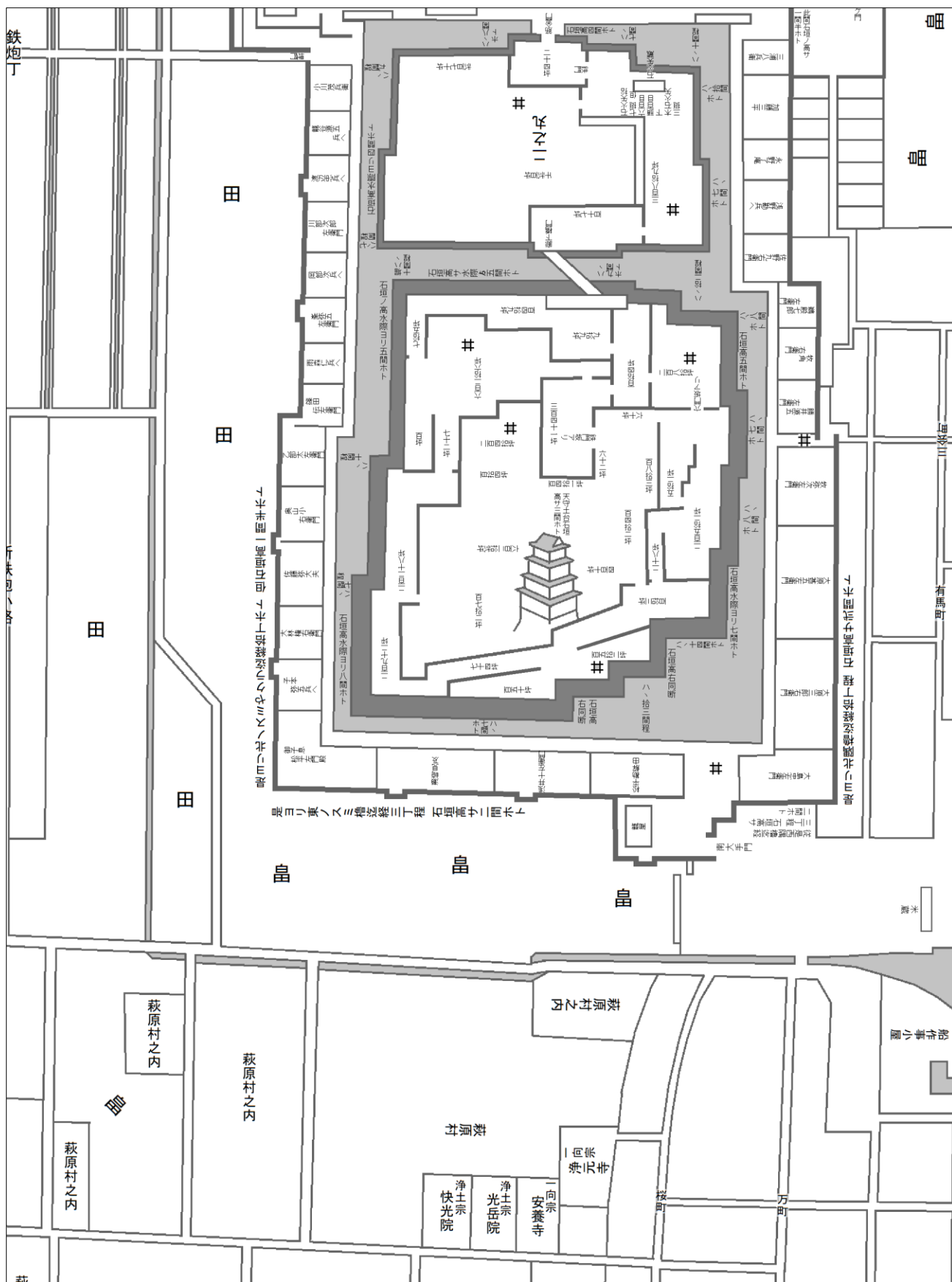


図6 翻刻分割図 ㊦ (索引図⇒図1) ※家中人名については図33および表2を参照。【北↑】

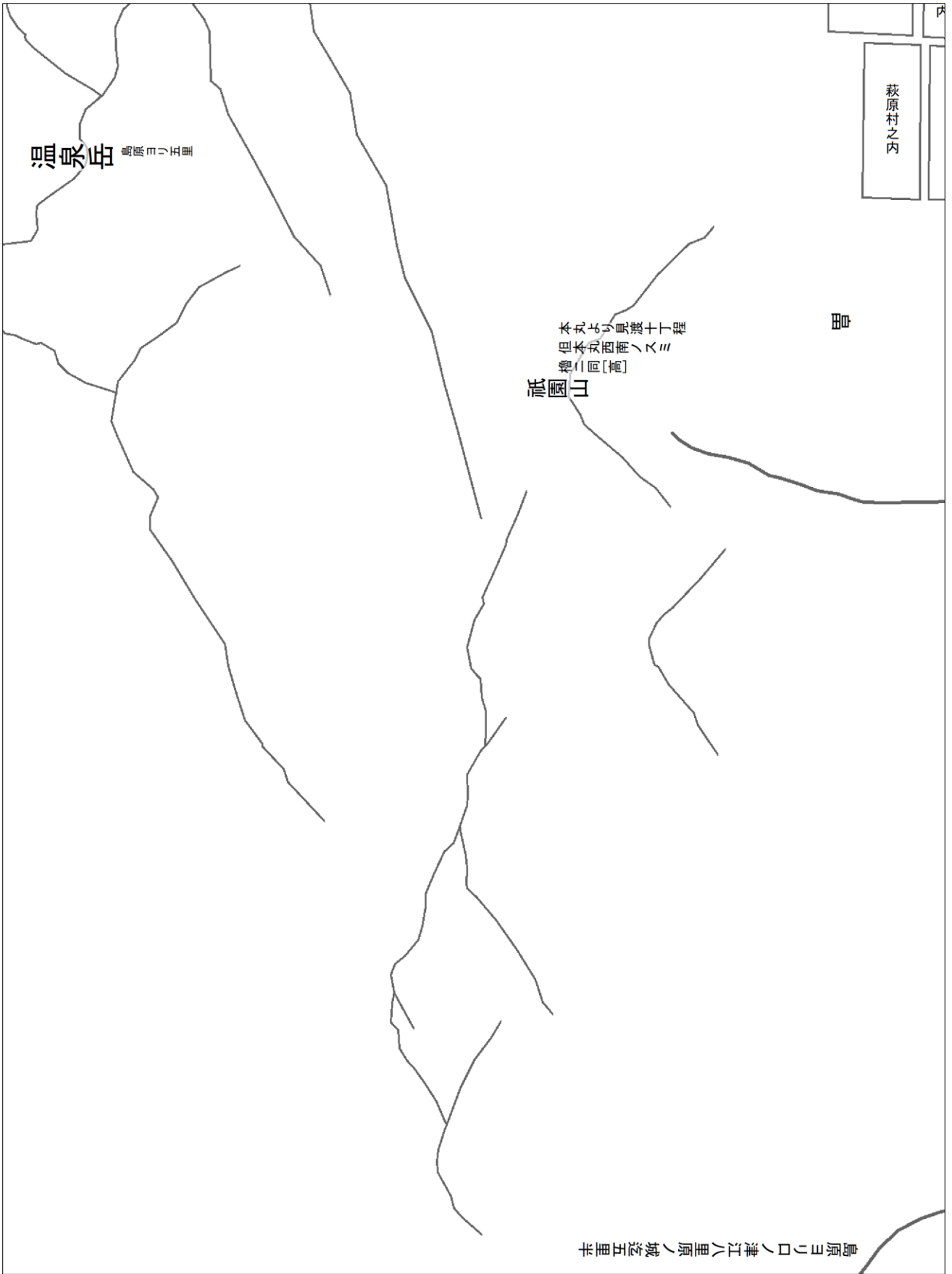


图8 翻刻分割图 ㊸ (索引图→图1) 【北↑】

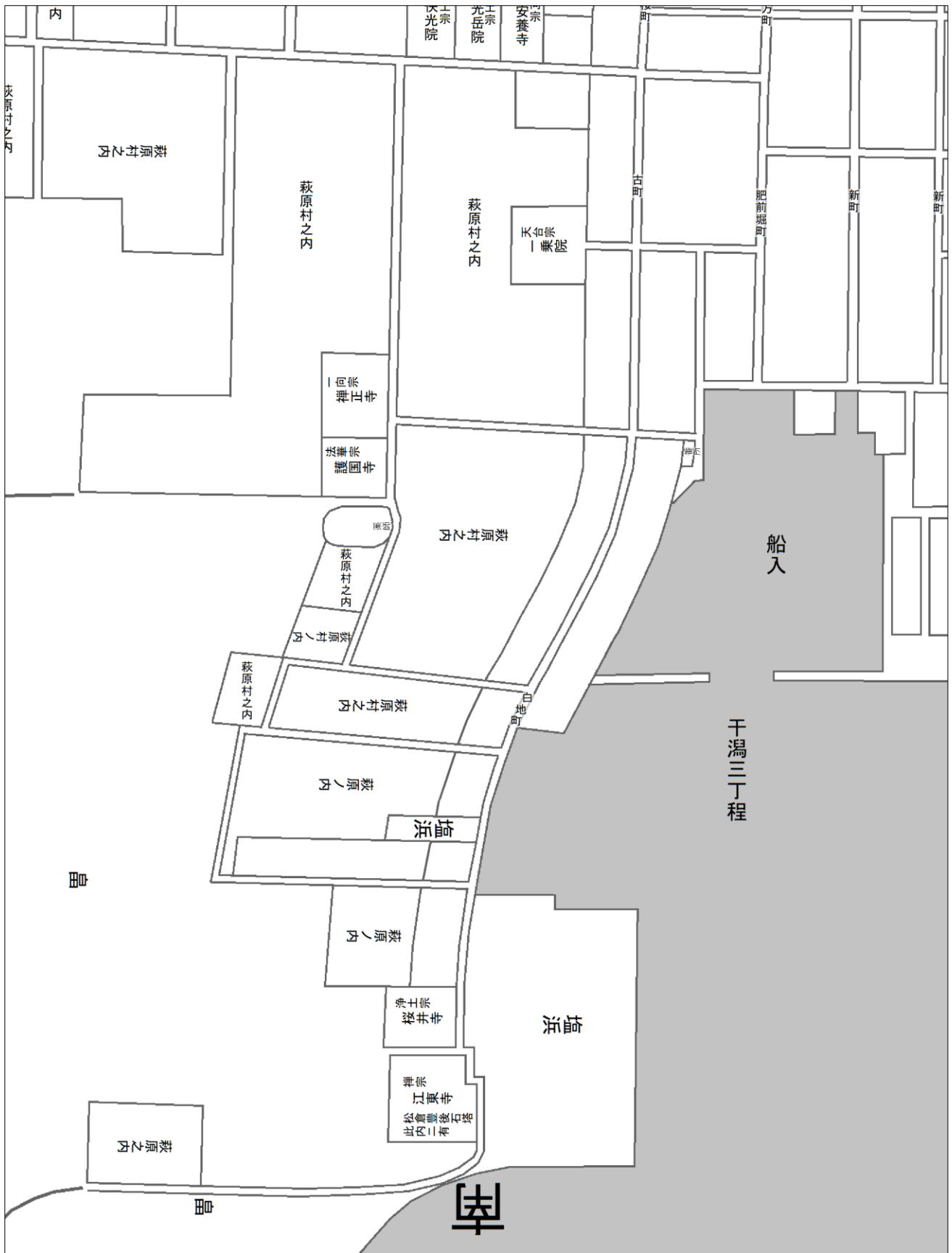


图9 翻刻分割图 ㊦ (索引图→图1) 【北↑】

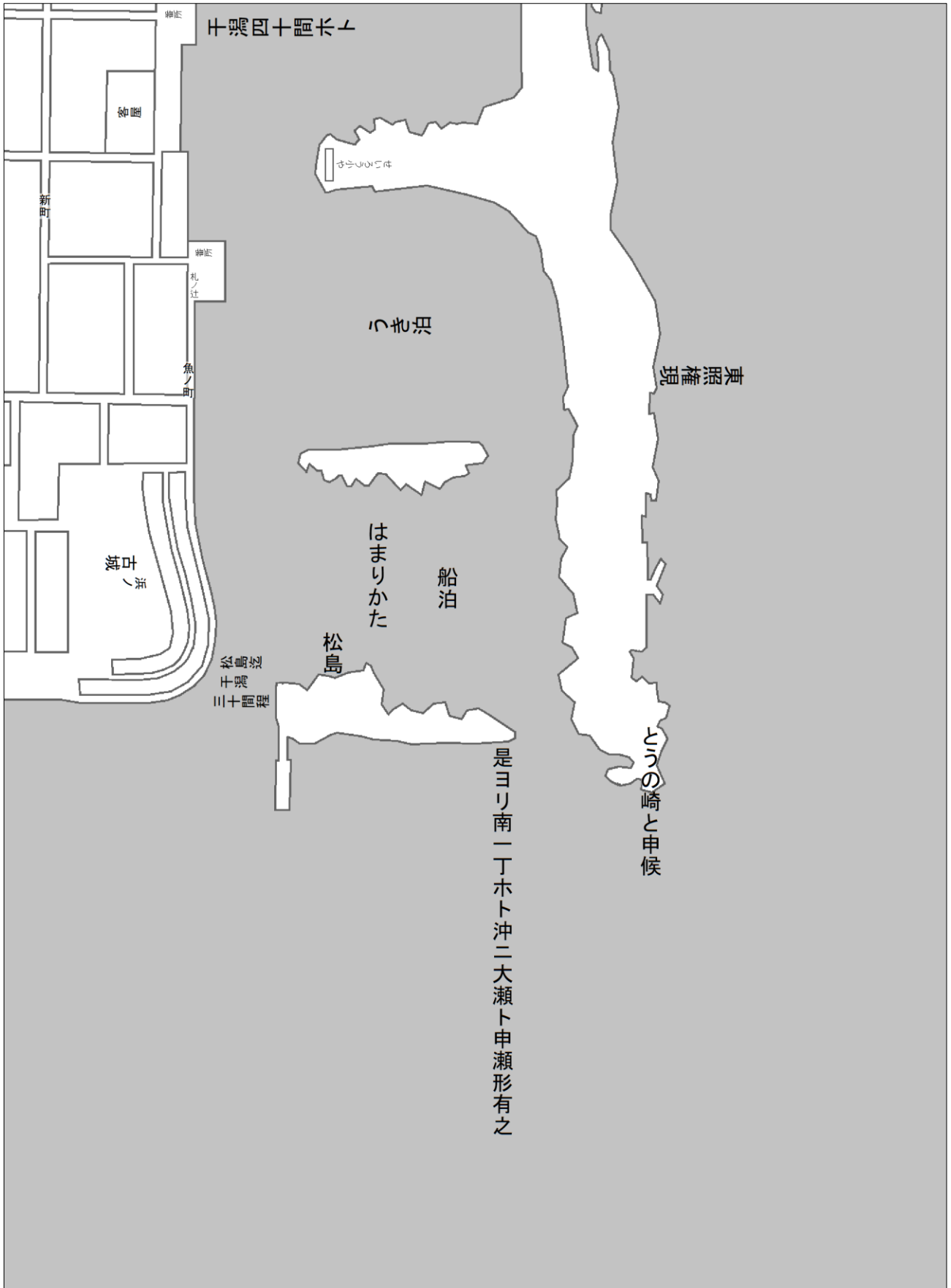


図10 翻刻分割図① (索引図⇒図1) 【北↑】

コラム「浜ノ古城」

浜ノ城は、元和2(1616)年から、島原城が完成する寛永元(1624)年にかけて、藩主松倉重政が居城とした城である(図11)。海に浮かぶ小島に築かれ、総面積は約5500平方メートルと小規模ながら、周囲を高さ4mの石垣が廻り、三重櫓1基、二重櫓2基、平櫓(または多門櫓)4基、櫓門1基を備えた堅牢な造りとなっていた。島原城完成後は同城の出丸と位置づけられるようになる。

後年、建物は破却または移築されたとみられるものの、石垣は寛文頃(1661-1673)までよく残存しており、その頃成立した絵図には、「古城 東西七十間、南北五十五間、此廻石垣高サ一間余リ」と記される。

やがて浜ノ城跡地の丘は削平され、寛政4(1792)年には島原山(眉山・前山)の山体崩壊によって完全に土砂に埋没、今ではその痕跡をうかがうことさえできない。

図12は、浜ノ城の位置を現在の地図上に比定したものである。現在の島原市新町、同中堀町、同弁天町の境付近に相当する(西田2017a)。

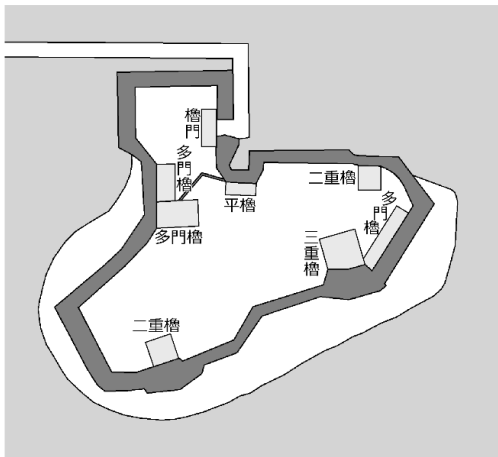


図11 浜ノ城推定復元図【北↑】
(絵図をトレースしたもの)

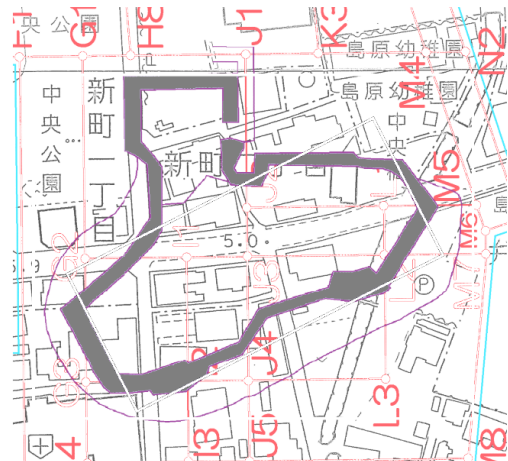


図12 浜ノ城位置比定図【北↑】
(『島原市街図』に加筆)

5. 写真図版

次頁以下に掲載する写真図版は以下の通りである。

- 図 1 3 外題・ラベル
- 図 1 4 「島原城廻之絵図」外題・全体
- 図 1 5～図 2 4 侍屋敷
- 図 2 5～図 2 7 料紙の欠損部
- 図 2 8 本丸・二ノ丸
- 図 2 9 郭内・郭周辺の間数・山岳・在郷
- 図 3 0 萩原村およびその周辺の社寺・本光寺・清雲寺・五社・両社
- 図 3 1 船入・町屋・浜ノ古城・海・潟・島嶼・湊

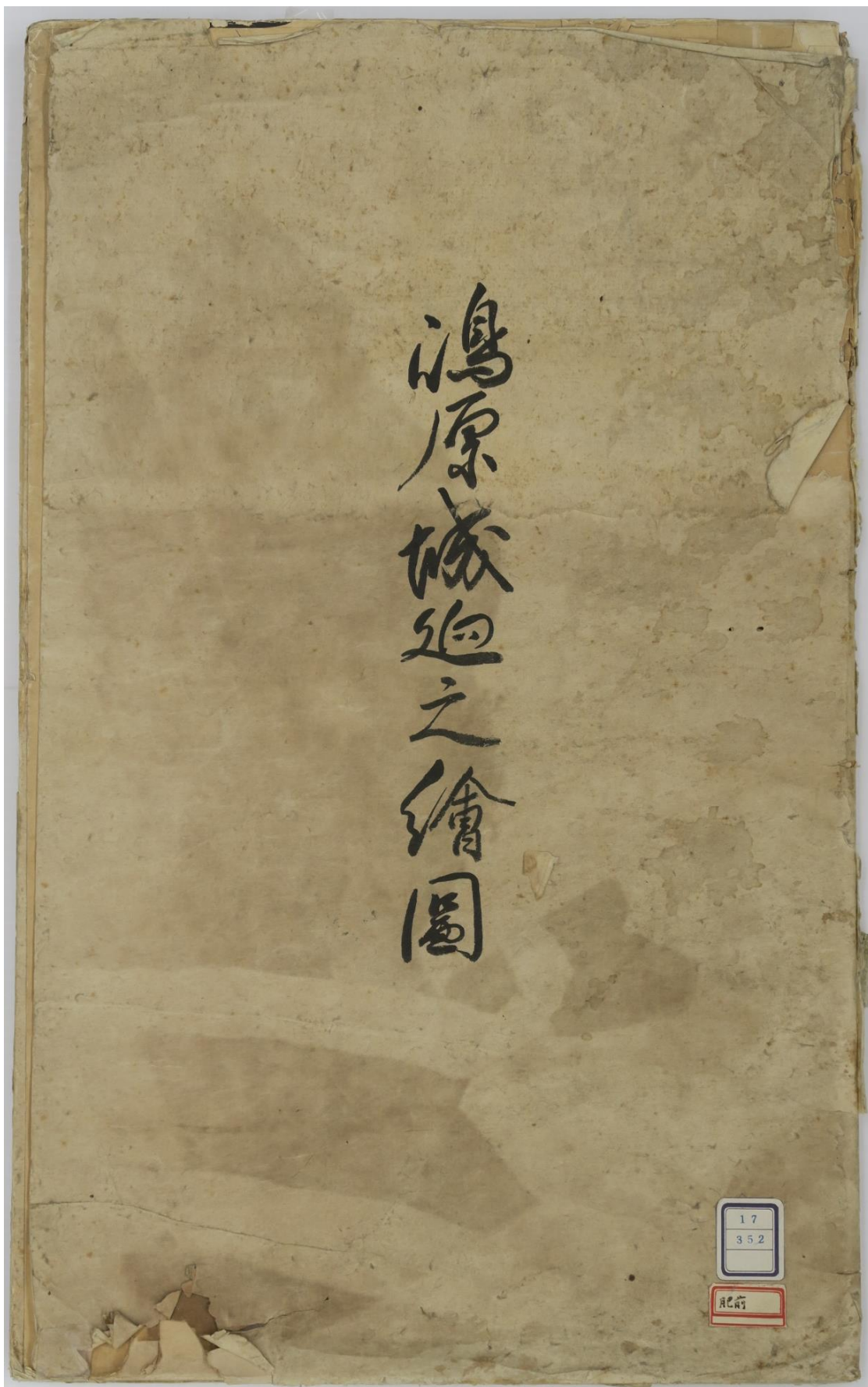


図13 外題・ラベル

島原城廻之繪圖

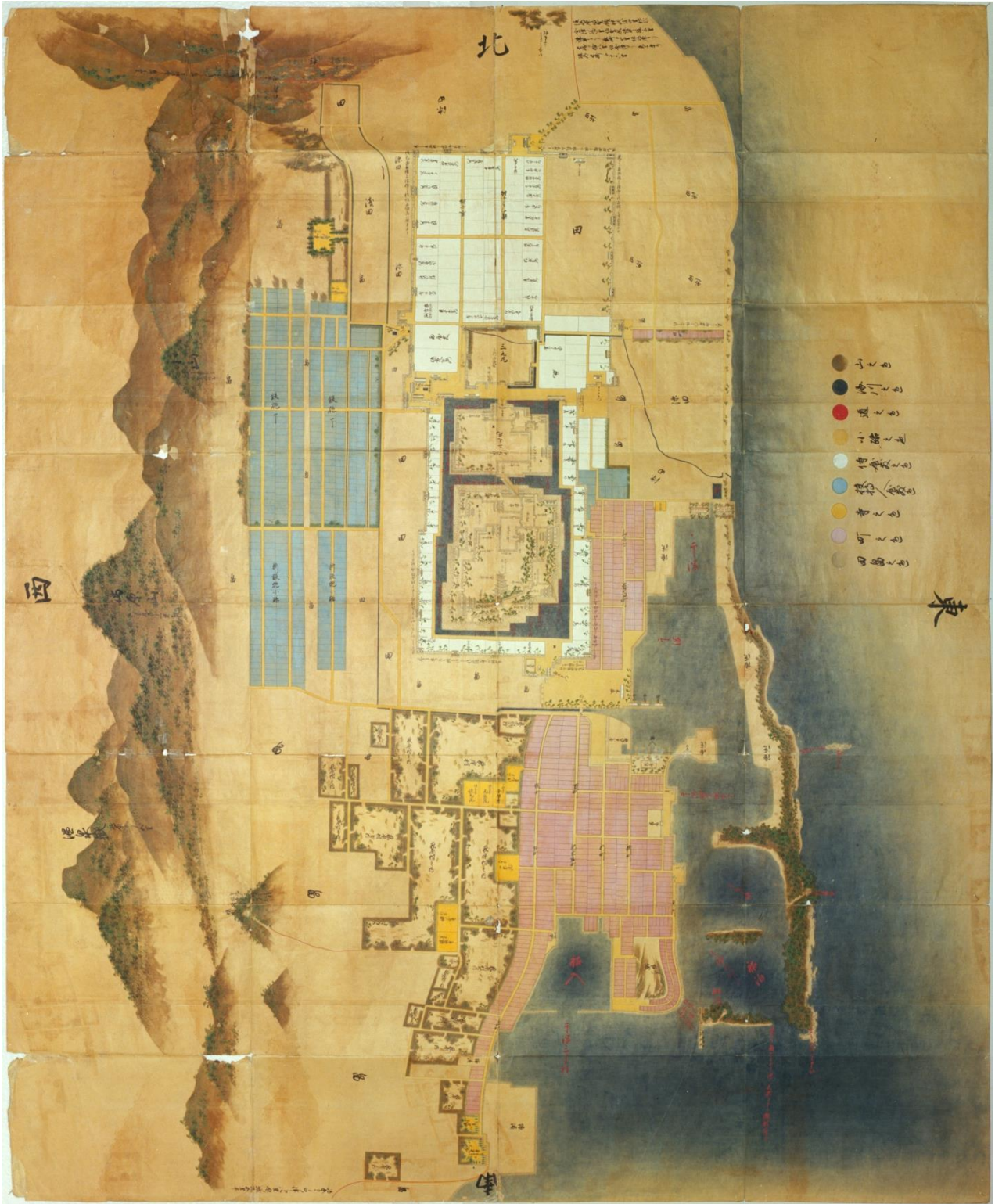


图 1 4 「島原城廻之繪圖」外題・全体（同縮率） 【北↑】

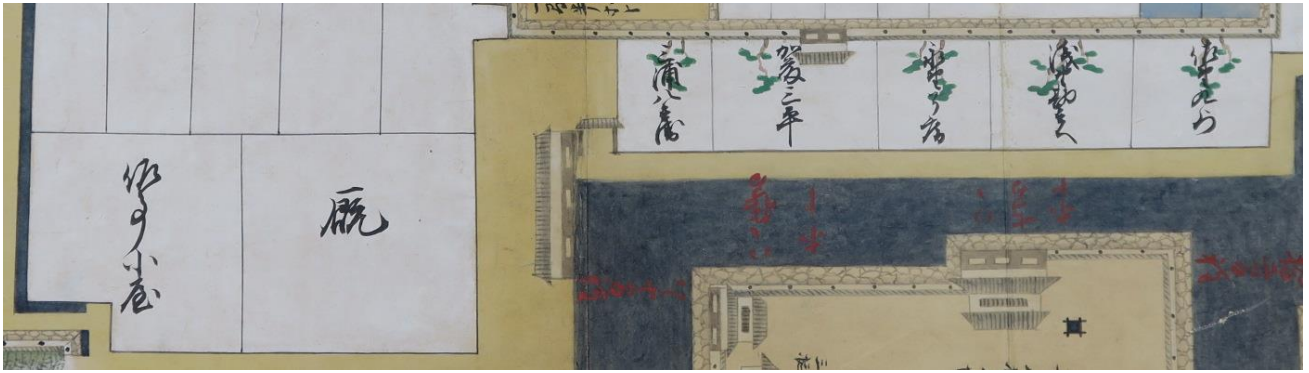


图 15 侍屋敷 東側 1 【北←】



图 16 侍屋敷 東側 2 【北←】



图 17 侍屋敷 南側 3 【北↓】



图 18 侍屋敷 南側 4 【北↓】



图 19 侍屋敷 西側 1 【北→】



图 20 侍屋敷 西側 2 【北→】



图 21 侍屋敷 西側 3 【北→】

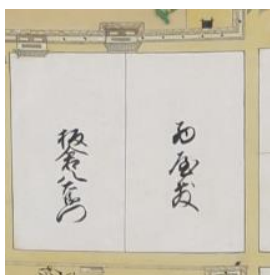


图 22 侍屋敷 西側 4 【北→】

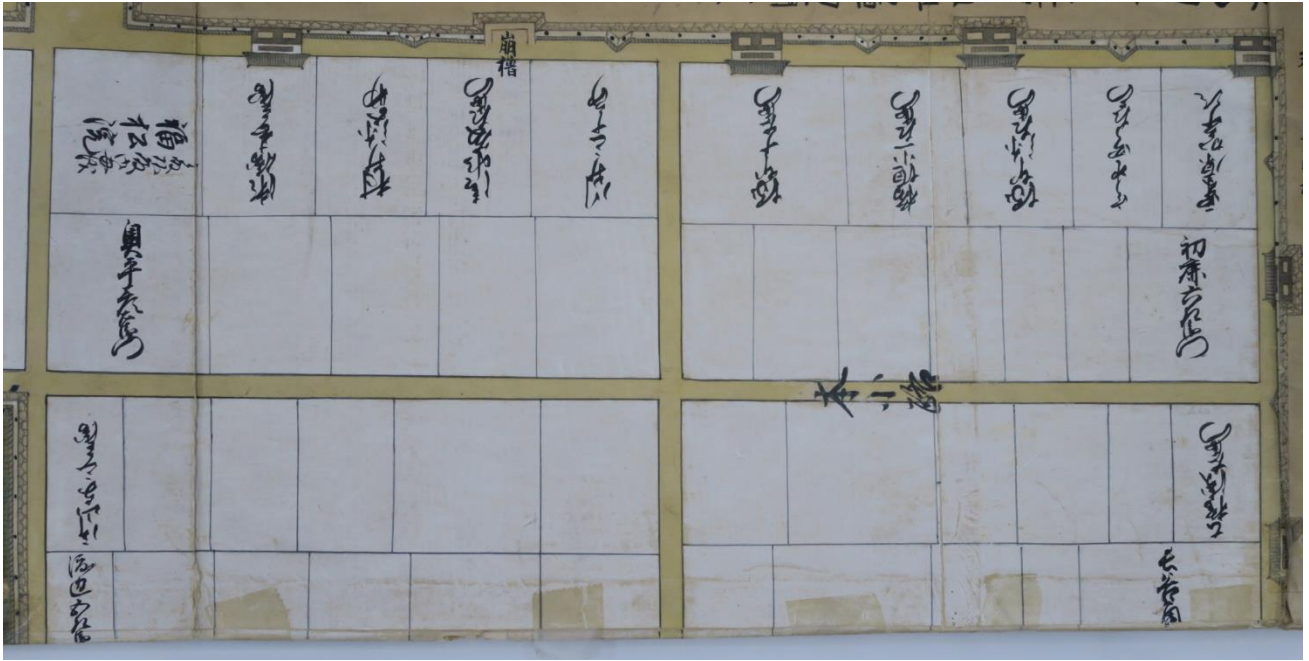


图 2 3 侍屋敷 北側 1 【北→】

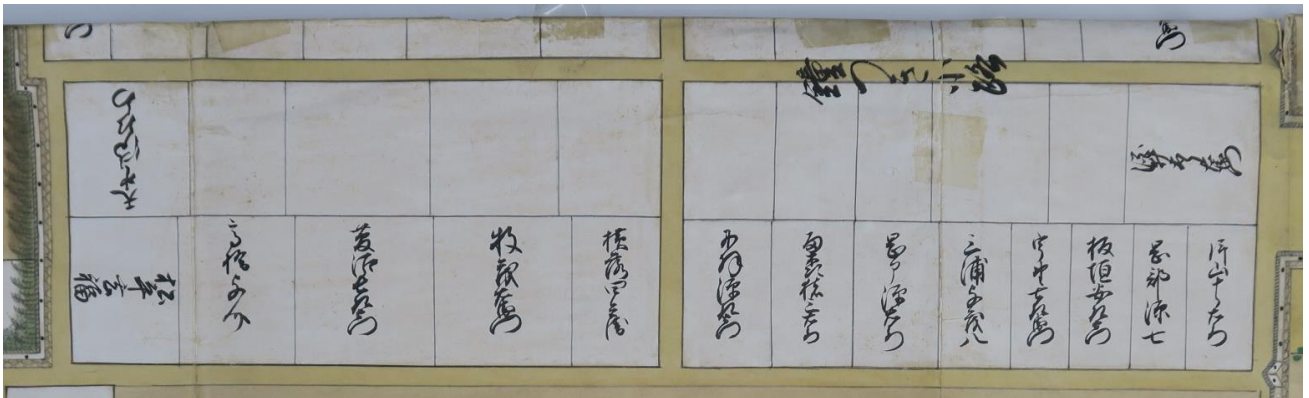


图 2 4 侍屋敷 北側 2 【北→】



图 2 5 欠損部 1 【北→】



图 2 6 欠損部 2 【北→】



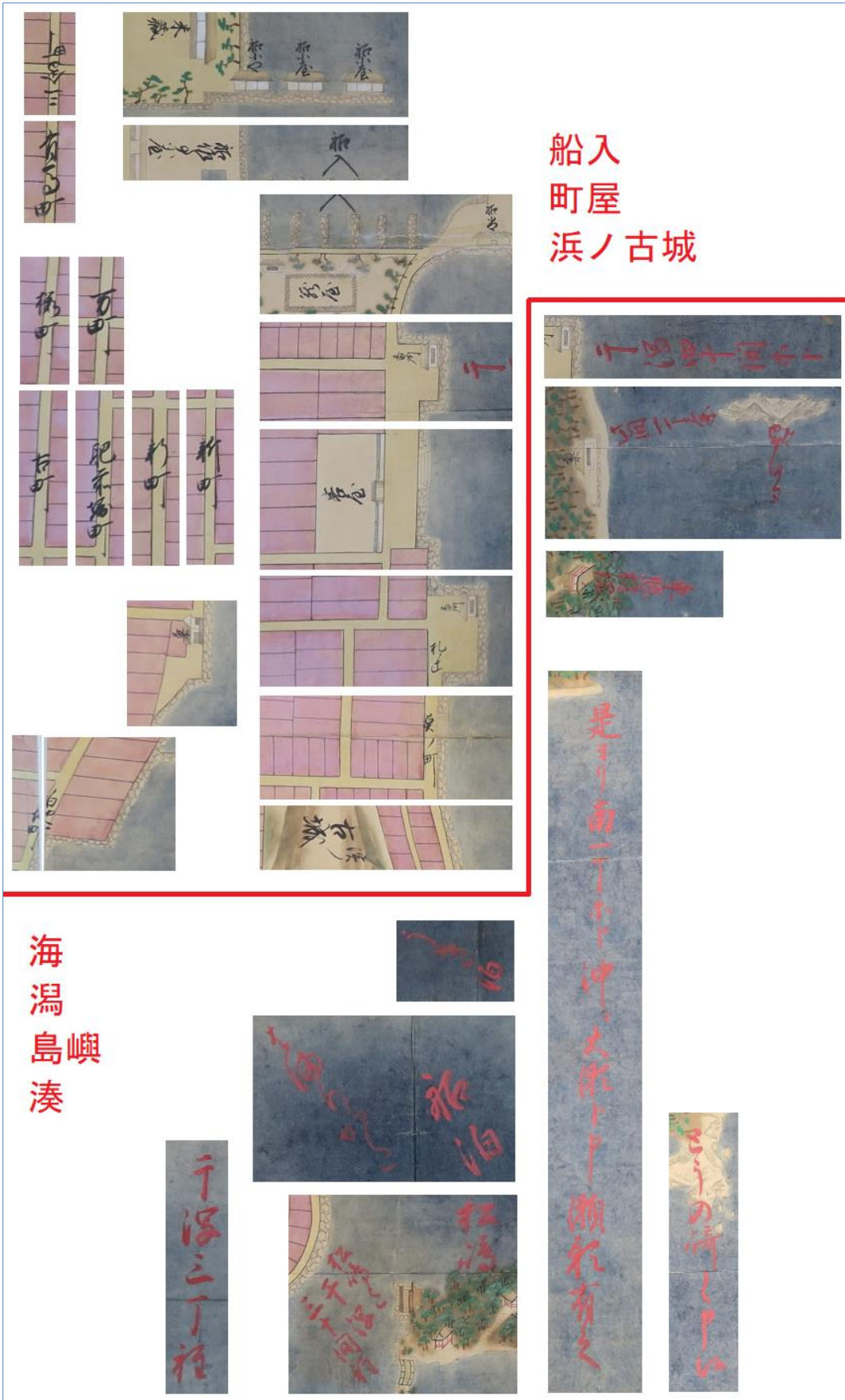
图 2 7 欠損部 3 【北→】



图28 本丸・二ノ丸 【北↑】



図29 郭内・郭周辺の間数・山岳・在郷 【北↑】



船入
町屋
浜ノ古城

海
湊
島嶼
湊

是ヨリ南ニ下リ沖ノ大津トシテ瀬有之

图31 船入・町屋・浜ノ古城・海・湊・島嶼・湊 【北↑】

6. 語註

【 あ 】

- 会 津 …あいつ（づ）。愛津。合津。会津村（現在、長崎県雲仙市愛野町乙）。会津村の西には愛津地峡があり、島原藩領・佐賀藩領の境となっていた。⇒図3 2
- 浅 田 …あさだ。泥の深くない田。
- 穴 門 …あなもん。石垣などを切りあけて造った低く小さい門。
- 池 …御手洗池（西田 2019c）。この場所のもと、陸繋砂州と本土に挟まれた湾の一部であったが、土橋の構築によって池となり、さらに湧き水の流入によって真水に転化したと考えられる（西田 2018b）。
- 石 火 矢 …いしびや。大砲。
- 魚ノ町 …魚の棚。漁師町。
- うき泊 …「乗船したまま旅泊するための場所」の意の固有名詞か。「浮き泊まる（うきとまる）」とは、「乗船したまま旅泊する」の意。
- 埋 門 …うずめもん（「島原藩土屋敷図」）。石垣に埋め込まれたように設けられた小門。
- 温泉岳 …温泉山。現在の温泉岳ではなく、現在の長崎県雲仙市小浜町雲仙付近の山岳を指すか（歴史地理学会 2001、林 1954c, 502-503 頁）。⇒図3 2
- 大手門 …追手門。城の正面の門。
- 小 山 …現在、島原農業高校と島原工業高校の間の独立丘陵。島原市小山町（字「小山」）。なお小山町は現在、「こやままち」と読むが、「御山」とする絵図もあり（西田 2020b）、近世における読みは「おやま」と考えられる。⇒図3 2

【 か 】

- 鐘つき小路…鐘突町（島原城下絵図翻刻稿⑤「肥前国嶋原城図」）。
- 木石火矢 …木製の石火矢か。
- 祇園山 …光伝寺（島原市寺町）本堂裏の丘陵。現在、登り口付近に「祇園山」と記した石柱がある。現在の島原市寺町（字「寺町」）。
- 客 屋 …「使者屋」（西田 2019a, c など）、「御使者屋鋪」（「森岳城図」）とも。幕府の役人や他藩の使者が島原を訪れた際、その使者あるいは随行員が宿泊・休息するための施設。藩側から重臣や役人が出向いて饗応にあたった（島原市教育委員会 2008, 17, 202, 235 頁；同 2010, 5 頁；同 2011, 98, 187 頁）。比定地については西田（2017a）を参照。
- 鉄 門 …くろがね（の）もん。鉄板を隙間なく張り付けた門か。⇒筋金門（すじがねもん）
- 経 …⇒経（はか）る
- 間 …けん。長さの単位。6尺5寸間で約1.97m。
- 江東寺 …こうとうじ。寛政4(1792)年の島原大変により埋没、のち寺基を移して再興した。

- 護国寺 …位置を過つか。他の多くの絵図では、薬師（堂）の南に図示する。
- 五社 …寛永7(1630)年以前の創立。大神宮・八幡宮・天満宮・春日大明神および、不明の一社を祀る（西田 2018b）。
- 御城米 …ごじょうまい。幕府が譜代大名に命じ、軍事・飢饉に備えて貯蔵させた米穀。島原藩の場合、5000石を御城米蔵に収納した。（島原市教育委員会 2013, 79 頁；入江 1972, 306-7, 313-4 頁）。
- 従是 …これより。

【 さ 】

- サキカケ門…さきがけ（の）もん。先掛門・先魁門・先菟門・先懸門とも表記する。
- 桜井寺 …さくらい寺。寛政4(1792)年の島原大変により埋没したが、旧地とほぼ同じ位置に再興した。
- 侍屋敷 …騎馬を許された武士（上級武士）の住まう屋敷、またはその屋敷町。
- 左門 …さもん。松平忠倫（ただとも 1657～1718）。松平忠房二男。幼名藤松、のちに左門を名乗る。延宝2(1674)年、島原藩主松平主殿頭忠房の世嗣となり、右京亮に任じられるも、貞享3(1686)年廃嫡。⇒主殿頭（とのものかみ）
- 塩浜 …しおはま。塩田。
- 島原山 …島原岳。前山。前岳。眉山。寛政4(1792)年に山体の一部が崩壊、津波を引き起こし、多くの死者を出した。⇒図32
- 浄元寺 …浄源寺。
- 白地町 …白土町。しらちまち。
- 新町 …城下町の草創期よりのちに町立てされた町。
- 杉谷村 …島原村の隣村。島原と千々石を結ぶ千々石道が通り、街村状を呈する。「7. 解説」の「Ⅶ. 北西部の地理描写」を参照。⇒図32
- 筋金門 …筋鉄門。すじがね（の）もん。現存する福山城、松山城の例から、「柱や板壁の表面に、縦の縞状に隙間をあけて鉄などの金属の細長い板を打ち付けた門」と考えられる。⇒鉄門（くろがね（の）もん）
- スミ櫓 …隅櫓。角櫓。すみやぐら。直角に折れた罫線上の櫓。
- 瀬 …岩礁または海中の小島。
- 瀬形 …瀬潟（せがた）か。瀬潟は、「潮が引くと島のように陸地化する海中の高み」の意（安室 2012, 20 頁）。
- 清雲寺 …晴雲寺。「清雲寺」は比較的初期の文書・絵図に見られる用字である。なお、西田(2020a) 24 頁に寺院名セリエーションを掲載した。
- せいろう小や…井籠小屋。製塩した塩を納める蔵か。深溝松平氏の福知山旧領付近には、「井籠（蒸籠）倉」と呼ばれる伝統的な倉庫建築が見られる。なお、「せいろう」は、「セイロウ」「せいろ」、「勢楼」とも表記される。また、「小屋」のほか、「屋形」を用いることもある。

禪正寺 …善正寺。比較的初期の文書・絵図に見られる寺院名である。立地は、近世中後期の光伝寺・善法寺付近に相当する。

【 た 】

- 丁 …「町」の代用、または省画。「ちょう」または「まち」。
- 丁 …ちょう。町。長さの単位。60間。6尺5寸間で約118m。
- 坪 …つぼ。面積の単位。6尺5寸間で約3.88㎡。面積は城兵の収容力と大きく関わる。
- 鉄炮町 …鉄砲足軽が居住した町。
- 天守土台 …てんしゅどだい。天守台の石垣。
- 東照権現 …徳川家康を祀った社。絵図作成当時の正確な立地は不明だが、字「権現山」（ほぼ、現在の霊丘公園に相当）にある高台の一つであろう（西田 2018b）。寛政4(1792)年の島原大變ののち、より低い位置に再建した。現在の霊丘神社。
- とうの崎 …どうのさき。「肥前島原之城図」に「ドウ崎」とも（西田 2019c）。恐らく東照権現堂宇に由来する「堂(ノ)崎」なのでであろう。
- 主殿頭 …とのものかみ。深溝松平家の当主が代々名乗った官職名。ここでは島原藩主松平主殿頭忠房（ただふさ、1619～1700）。⇒左門（さもん）⇒福松院
- とり島 …鳥島。鳥島瀬。島原の陸繋砂州近くにかつて存在した島嶼の一つ。

【 は 】

- 経 …「～を経（はか）る」と読むか。「経」には「地を測量する」の意がある（『大漢和辞典』「経始」の項）。
- 萩原村 …島原村本村およびその中心集落を指すか。 ⇒「7. 解説」の「VIII. 萩原村について」を参照。
- は、 …はば。幅。巾。
- 馬場 …ばば。桜馬場。なお寛文12(1672)年、馬場を仕切る門の造営を幕府に願い出ている（「島原城之図」）。
- 浜ノ古城 …浜城（はまのじょう）跡。島原城が完成するまで、松倉重政が居城とした城。近世初頭のうちに廃された（西田 2017a）。⇒コラム「浜ノ古城」 ⇒肥前堀町
- はまりかた…はまりがた。はまり渦。他の史料に「はまりがた」「ハマリ渦」などの表記が見える（歴史地理学会 2001）。固有名詞とみられる。
- 原ノ城 …はるのじょう。原城。⇒図32
- 番所 …往来番所、船番所、遠見番所など。
- 肥前堀町 …慶長19(1614)年に有馬氏が日向へ転封となったのち、南目は佐賀藩が預かることとなり、島原村浜城には綾部左京と中野甚右衛門が定番として入った。その後、浜城防禦のために堀を掘り、土手を築いたが、その際、堀を肥前堀と名付けている（国書刊行会 1970, 591頁）。

兵 へ …兵衛。音は「ひやうゑ (ひょうえ)」または「びやうゑ (びょうえ)」。

福松院 …福昌院。島原藩主松平忠房の生母。天和2(1682)年没。⇒主殿頭 (とのものかみ)

深 田 …ふけだ。泥の深い田。

札ノ辻 …ふだのつじ。高札所。通例、人馬の往来が多い所に設けられる。

不断御座所…ふだん (の) ござしょ。藩主が日常起居した御殿。常御殿。

扶持人屋敷…知行地を持たず、藩の蔵米から扶持の支給を受ける武士 (中・下級武士) の住まう屋敷、またはその屋敷町。

船 入 …堤防などを備えた人造の港。

船 泊 …ふなどまり。ふなはて。船が停泊すること、またはその場所。

ア …「β」(「部」の省画) の別体。

ホ ト …ほど。程。

本光寺 …現在の柏野住宅あたり。明治3(1870)年、現在地に寺基を移す。

本小路 …都市の中心の町、最初にできた町。

【ま】

丁 …「町」の代用、または省画。「まち」または「ちょう」。

松倉豊後 …初代島原藩藩主、松倉豊後守重政 (1574?~1630)。

松 島 …島原の湾内にかつて存在した島嶼の一つ。弁天山を擁する。島原大変により陸地の一部となった。現在の島原市弁天町1丁目・湊道1丁目・蛭子町1丁目付近。

三会村 …みえむら。杉谷村の隣村。⇒杉谷村 ⇒図32

水 際 …みぎわ。陸地 (ここでは石垣) の、水と接するところ。

む[つ][き][] …⇒「7. 解説」の「VI. 料紙の欠損」および「IX. 地名「六ツ木」について」を参照。

目 …め。匁 (もんめ) に同じ。重さの単位。約3.75g。なお、「六百目頭百目下」は、「最も大きな石火矢は600目筒、最も小さな石火矢は100目筒」の意であろう。

【や】

薬 師 …やくし。薬師堂 (西田 2019c)。薬師如来を安置した堂。立地は現在の叶寺。

方 …より。「よ」と「り」の合字。

【ら】

里 …長さの単位。1里=36町=2160間。1間=6.5尺とした場合、1里=約4254mとなる(「塵劫記」)。

両 社 …鷹島社・愛宕社。このうち愛宕社は、延宝3(1675)年に「五社」の境内へ移った(「万覚書」延宝3年7月17日・同25日条。西田 2018b, 15頁に翻刻文を掲載。)

廊下橋 …屋根を設けた橋。極楽橋。

籠 屋 …ろうや。籠屋。牢屋。

【わ】

ゑんせう蔵…えんしょう（焰煙・煙硝・塩硝）ぐら。火薬庫。

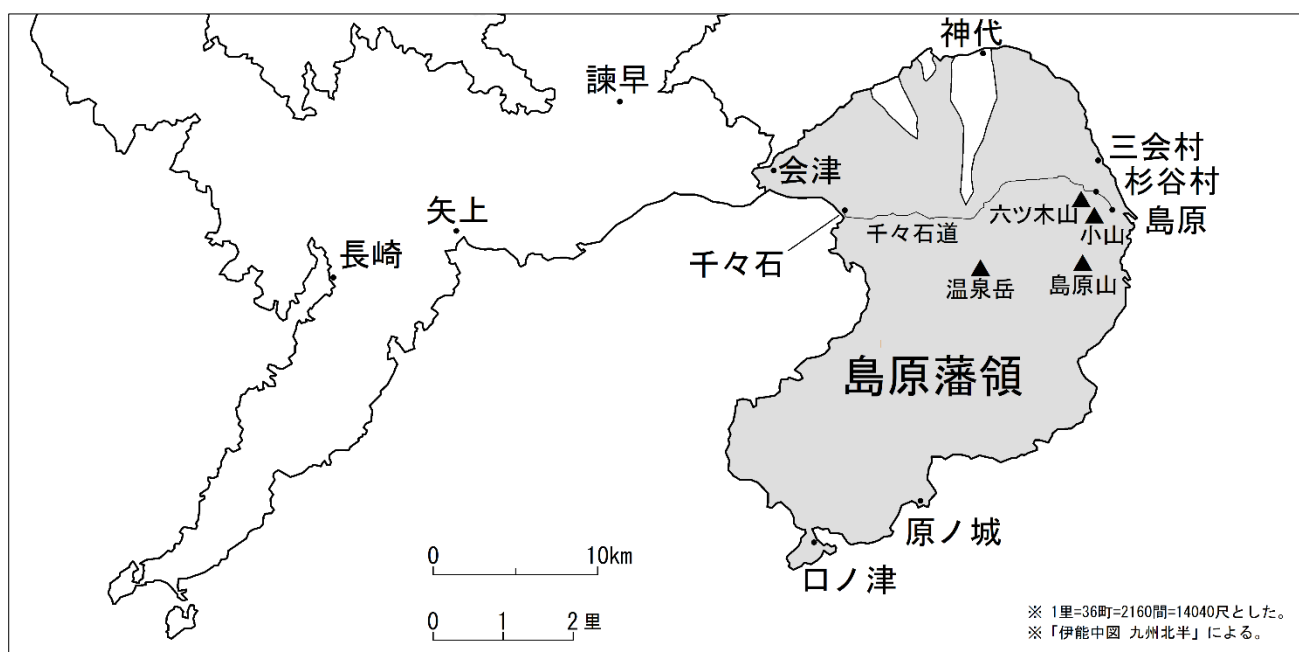


図32 島原藩肥前領周辺図 【北↑】

7. 解説

I. 景観年代

下記の理由から本図の景観年代は、寛文 9(1669) 年以降の、寛文 9 年に近い年紀、下っても寛文 13(1673) 年と考えられる。

- 1) 「島原城廻之絵図」には深溝松平家中の名が数多く見られる。従って、その景観年代は、松平忠房が肥前・島原に入国・入城した寛文 9(1669) 年以降となる。
- 2) 後掲の表 2 は、「島原城廻之絵図」に記載された人名の一覧（左項）、および、その人名が、次に掲げる資料 A～資料 I の藩日記に見えるか否かを○・△・×・*の記号を用いて一覧にしたもの（右項）である。

資料 A 寛文 7(1667) - 寛文 9(1669) 福知山藩日記

資料 B 寛文 11(1671) - 延宝 7(1679) 島原藩日記

資料 C 天和 2(1682) - 天和 4(1684) 島原藩日記

資料 D 貞享元(1684) - 貞享 5(1688) 島原藩日記

資料 E 元禄元(1688) - 元禄 6(1693) 島原藩日記

資料 F 元禄 7(1694) - 元禄 10(1697) 島原藩日記

資料 G 元禄 11(1698) - 元禄 12(1699) 島原藩日記

資料 H 元禄 16(1703) - 宝永 5(1708) 島原藩日記

資料 I 享保 2(1717) - 享保 3(1718) 島原藩日記

○印は、左項と全く同じ人名か、同じ音の人名（例えば、篠田と笹田）が見える場合、△印は、左項の人名と一字違いの人名が見える場合（例えば、子本と千本）、×印は、左項の人名が見出せない場合、*印は、左項の人名と同じ姓さえ見出せない場合、である。そしてこの「表 2」中の、それぞれの印の頻度を表にまとめたのが次に掲げる「表 1」である。

	資料 A	資料 B	資料 C	資料 D	資料 E	資料 F	資料 G	資料 H	資料 I
○の数	35	36	33	29	22	21	19	15	12
△の数	8	15	9	10	12	13	12	11	10
×の数	18	6	14	15	19	19	21	24	25
*の数	0	4	5	7	8	8	9	11	14

表 1 資料別にみる各印の頻度

注目すべきは、資料Bから資料Iにかけて○印の頻度が漸減する一方で、×印・＊印の数が漸増することである。親から通名を受け継ぐこともあろうが、それでも○印の漸減や、×印・＊印の漸増は、「島原城廻之絵図」景観年代以降の滅知・召放・断絶によるものと考えられるから、資料Iから資料Bへ遡るにつれて「島原城廻之絵図」の景観年代に近づく蓋然性が高くなる、といえよう。しかも、資料Aに記されながら、資料Bに記されない人名が少なからずあることは、「島原城廻之絵図」が寛文9年もしくは、寛文9年以降の、寛文9年に近い景観年代を持つことを示唆している。

- 3) 肥前・島原への入国・入城の後、松平忠房は、三ノ丸の東および西に接した仕切門（冠木門）の新規設置を寛文12(1672)年6月3日、幕府に願い出、同年同月6日には許可が下り（「島原城之図」, 白峰 2005, 2 頁）、その後、竣工しているが、「島原城廻之絵図」はその竣工以前の様子を描く。
- 4) 寛文12(1672)年6月3日、松平忠房は先掛門（さきがけもん。先魁門、先懸門とも）の平入虎口から柵形虎口への改修を幕府へ願い出、同年同月6日に許可が下り（「島原城之図」, 白峰 2005, 2 頁）、寛文13(1673)年には棟上が行われているが（島原市教育委員会 2008, 189 頁）、「島原城廻之絵図」はその改修以前の様子を描く。
- 5) 城下の東部に「両社」と記された2宇の社が見えるが、これは史料に、「太賀島ノ宮ニ並有之愛宕ノ堂」とあることから（「万覚書」14K/4114/8, 延宝3年7月17日条）、並び立っていた太賀島（鷹島）社・愛宕社の両社と考えられる。愛宕社は延宝3(1675)年、近接する五社の境内に移っているので（「万覚書」14K/4114/8, 延宝3年7月25日条）、「両社」は、延宝3(1675)年以前の様子を表現・描写したものと考えられる。
- 6) 延宝3(1675)年、鷹島社の社殿の向きを、北向きから南向きに変更しているが（「万覚書」14K/4114/9, 延宝3年8月11日条）、「島原城廻之絵図」はその変更前の様子を描く。
- 7) 「福松院」（福昌院）の屋敷が図示されるが、福昌院は天明2(1682)年に死去している。
- 8) 「左門」（松平忠倫）の屋敷が図示されるが、松平忠倫は延宝2(1674)年、世嗣として認められたのち、「右京亮」に叙任されているから、景観年代は延宝2年以前と考えられる。

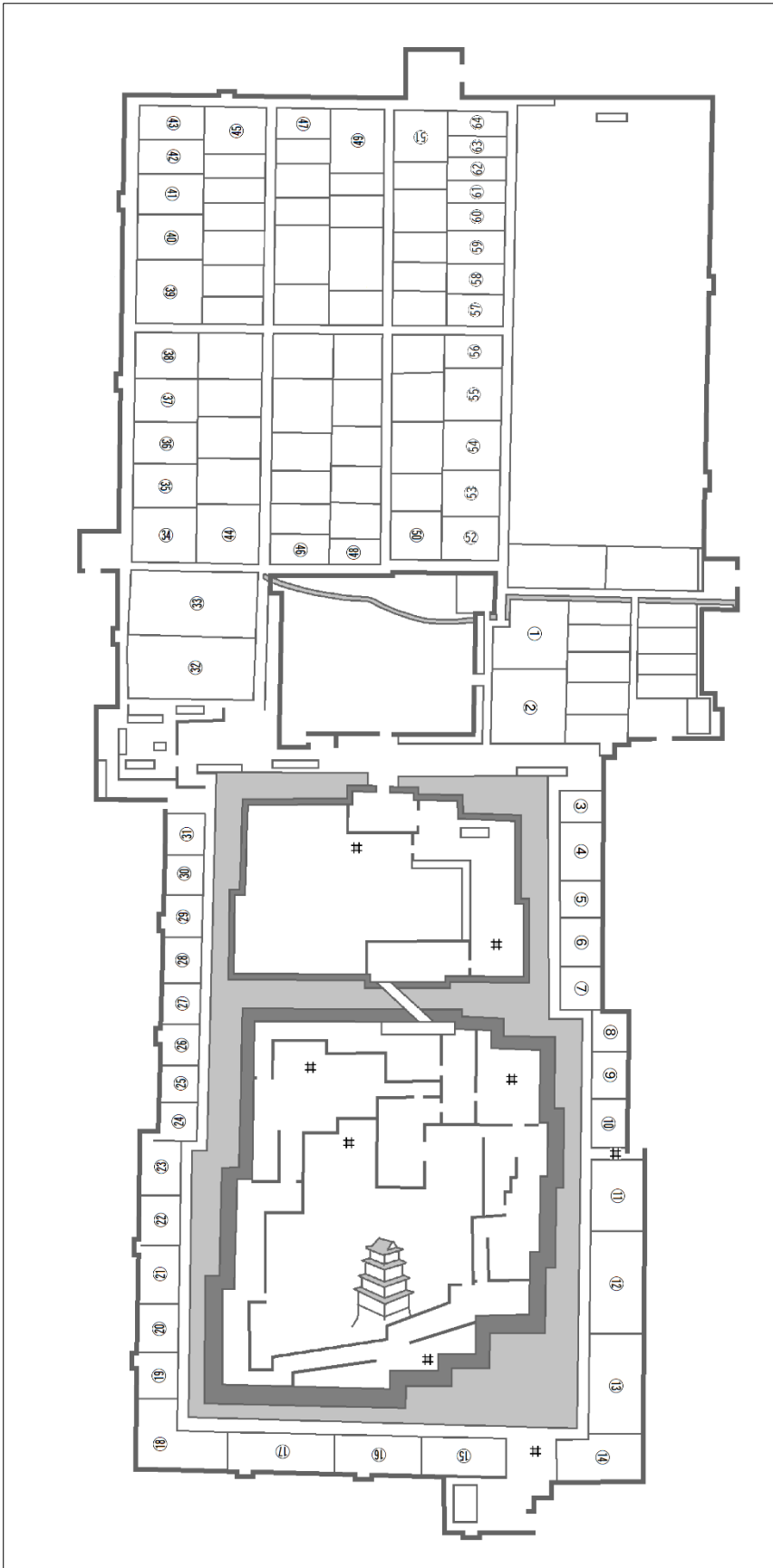


图 3 3 郭内侍町区割图 (图 1 5 ~ 图 2 4 参照) 【北 ↑】

「島原城廻之絵図」の記載 (図33の通番および家中人名等)		左項人名の藩日記における記載の有無(○有、△一字違い有、×無、*同姓も無)									
		資料A	資料B	資料C	資料D	資料E	資料F	資料G	資料H	資料I	資料A～Iにおける 記載(△の場合など)
		1667-1669	1671-1679	1682-1684	1684-1688	1688-1693	1694-1697	1698-1699	1703-1708	1717-1718	
①	作事小屋	---	---	---	---	---	---	---	---	---	
②	厩	---	---	---	---	---	---	---	---	---	
③	三浦八兵衛	○	○	×	△	×	△	△	△	*	三浦惣兵衛
④	加藤三平	○	×	×	×	○	×	×	×	×	
⑤	永野了庵	△	△	×	*	*	*	*	*	*	隆庵
⑥	浅野勘兵へ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
⑦	佐野九右衛門	○	○	×	×	△	△	△	△	△	佐野六右衛門
⑧	鶯殿七郎左衛門	△	△	△	△	△	△	△	△	△	鶯殿七郎右衛門
⑨	牧角右衛門	○	○	×	×	×	×	×	×	×	牧覚右衛門
⑩	勝井源五左衛門	○	○	○	○	*	*	○	○	×	
⑪	牧弥次左衛門	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
⑫	大原基五左衛門	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
⑬	大原三郎右衛門	○	○	○	×	×	×	×	×	×	
⑭	大島忠左衛門	○	○	○	○	○	○	×	×	×	
⑮	松平勘解由	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
⑯	浅井十左衛門	○	○	○	○	△	×	○	○	○	浅井仁左衛門
⑰	瀬崎見及	×	*	*	*	*	*	*	*	*	
⑱	御子息 松平左門殿	○	○	○	×	×	×	×	×	×	左門様
⑲	子本弥五兵へ	△	△	△	△	×	*	*	*	*	千本弥五兵衛
⑳	大林権右衛門	×	△	○	○	×	×	*	*	×	大塚権右衛門
㉑	佐藤弥大夫	×	○	○	○	×	○	△	×	×	佐藤孫大夫
㉒	奥山小右衛門	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
㉓	乙部太左衛門	×	△	△	△	×	×	×	×	×	乙部太郎左衛門
㉔	篠田伝左衛門	○	○	○	○	○	○	○	○	○	笹田伝左衛門
㉕	雨森仁兵へ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
㉖	峯弥五左衛門	○	○	○	○	*	*	×	*	*	
㉗	岡部次兵へ	×	○	△	△	△	△	△	△	△	岡部武兵衛
㉘	川部次郎左衛門	×	△	×	×	×	×	×	×	×	川鍋次郎左衛門
㉙	渡辺忠兵へ	×	○	○	○	△	○	△	△	△	渡辺孫兵衛
㉚	籠谷源五兵へ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
㉛	小川茂兵衛	○	△	△	△	×	△	△	△	△	小川安兵衛
㉜	板倉八右衛門	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
㉝	西屋敷	---	---	---	---	---	---	---	---	---	
㉞	主殿頭御母儀 福松院	△	△	*	*	*	*	*	*	*	福昌院(1682 死去)
㉟	瀬崎基兵衛	×	*	*	*	*	*	*	*	*	
㊱	村井弥五助	○	○	×	×	×	×	×	×	×	
㊲	清水藤左衛門	○	△	○	○	△	△	△	×	×	清水善左衛門
㊳	川井三十郎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
㊴	塚本十右衛門	○	○	○	○	○	○	○	○	×	
㊵	稲垣小一左衛門	○	○	○	○	○	*	*	*	*	
㊶	塚本弥左衛門	×	○	○	○	○	×	×	×	×	
㊷	宇野四郎左衛門	○	×	×	×	×	×	×	×	×	
㊸	栗原加平次	×	×	○	○	○	○	○	*	*	
㊹	奥平彦右衛門	△	△	△	△	△	△	△	△	△	奥平彦左衛門
㊺	初鹿六左衛門	○	*	*	*	*	*	*	*	*	
㊻	片山与三兵衛	△	△	△	△	△	△	△	△	△	片山与惣兵衛
㊼	土橋浅右衛門	○	○	○	○	○	○	△	△	△	土橋孫右衛門
㊽	渡辺五左衛門	×	○	○	×	△	×	×	×	△	渡辺助左衛門
㊾	長谷[奥右]衛門	○	○	○	○	○	×	*	*	*	
㊿	天野伝左衛門	△	△	△	△	△	×	×	*	*	天野伝右衛門
1	酒井太郎右衛門	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
2	松平玄福	×	△	×	×	×	△	△	×	×	松平玄ト/松平玄丈
3	高橋与介	×	○	○	○	○	△	○	○	×	高橋半助
4	菅沼長左衛門	○	×	○	×	×	×	×	×	×	
5	牧茂右衛門	×	○	○	○	○	○	○	△	×	牧三右衛門
6	横落四兵衛	○	*	*	*	△	△	×	×	×	横落四郎兵衛
7	丹羽源左衛門	○	○	×	*	*	×	*	×	*	
8	雨森猪三右衛門	×	×	×	×	×	×	×	×	×	
9	岡部源右衛門	○	○	○	○	×	×	×	×	×	
0	三浦与茂八	×	×	×	×	×	×	×	×	*	
1	宇野七左衛門	○	○	×	×	×	×	×	×	○	
2	板垣安左衛門	△	△	△	△	△	△	△	△	△	板橋安左衛門
3	岡部源七	×	○	×	×	×	×	×	×	×	
4	片山十郎右衛門	×	○	○	○	○	○	○	×	×	

資料A: 福知山市史編さん委員会(1978)199-446頁。
資料B: 島原市教育委員会(2008)242-52頁。
資料C: 島原市教育委員会(2010)242-55頁。

資料D: 島原市教育委員会(2011)298-311頁。
資料E: 島原市教育委員会(2012)228-39頁。
資料F: 島原市教育委員会(2013)248-60頁。

資料G: 島原市教育委員会(2014)211-21頁。
資料H: 島原市教育委員会(2015)227-36頁。
資料I: 島原市教育委員会(2017)291-301頁。

表2 郭内侍町に記載の人名等一覧 ※文字が異なっても、音が同じであれば、同じ人名とみなした。例) 篠田=笹田

II. 色分目録

「島原城廻之絵図」は色分目録を付載する。このうち、「侍屋敷」・「扶持人屋敷」・「町」・「寺」・「田島」の色分けは、単なる居住区分にとどまらず、それぞれの地区を支配・管理する部署を明確に区別する。絵図作成にはその意図もあったのかも知れない。なお色分目録では、赤色を「道之色」、橙色を「小路之色」とするが、実際の図法では赤色（厳密には赤色の一本線）は在郷道（のうち主要街道）を表し、橙色は、街道筋・小路にかかわらず城下の道筋を表している。

III. 作成年代

侍屋敷に見える「左門殿」という表記は、「作成当時、左門と名乗っていた人物が存命であったこと」を示すものではなかろうか。であるなら、「島原城廻之絵図」の作成は延宝2(1674)年を下らない、すなわち、景観年代から6年を経ずして作成されたことになる（「I. 景観年代」の8）を参照）。

IV. 作成の主体

下記1)～4)から、作成の主体は島原藩家中に（ほとんど）所縁のない、他藩または幕府の機関と考えられる。主な情報源は島原藩側が作成した絵図であろうが、下記1)および2)から、島原藩側が作成した絵図をそのまま謄写した可能性は否定されよう。

- 1) 「主殿頭殿」「御子息松平左門殿」との記載があるが（図33・表2）、（官途+）殿付は一般に、他藩・幕府側の史料に見られる表現である。
- 2) 「不断御座所」（三ノ丸）・「主殿頭殿御母儀」（図33・表2参照）との記載があるが、島原藩の作成にかかるとすれば、敢えてこのような注記は施さないであろう。
- 3) 字形の近似による誤写（千⇒子、善⇒藤など）、音の近似による誤写（橋⇒垣、ト⇒福など）、右衛門⇄左衛門の誤写などが多く見受けられる。これは島原藩家中の名に馴染みのない者が、機械的に文字を写した結果と考えられる。
- 4) 彩色・文字が丁寧であることから、絵図方あるいは絵図師の作成にかかる可能性を指摘できる。

V. 伝世

- 1) 絵図裏の裏打紙に記された表題は、その字形・墨蹟から絵図本紙に記された文字と同筆の可能

性がある（「嶋」の山偏・「原」の雁垂の左払い・「廻」の繞部分）。であるなら、裏打を改めることなく伝世したことになる。それはつまり、表題が作成時のままである、ということである。

- 2) 料紙に虫損はほとんど見られない。恐らくは、近世を通して定期的に曝涼が行われていたのであろう。一方で、黴の痕跡と著しい緑青焼けが認められることから、一定期間水分に曝され、そのため黴が発生し、緑青焼けが進展したものと考えられる。
- 3) 「島原城廻之絵図」を含む熊本藩の絵図（の一部）は廃藩置県後、県庁へと引き継がれた。郷土文化研究所（1954）によると、「終戦前（筆者註：「戦前」の意）までに県に保管されていた古地図」のうち「藩絵図」は「264部、527点」であったという。その後、「古地図」の一部は戦災により焼失したが、難を逃れた367点が1948年に（熊本）県文書課から熊本県立図書館へ移管され、現在に至る。「島原城廻之絵図」はこの367点の絵図のうち、352番目の史料である（郷土文化研究所1954, 3, 73頁）。
- 4) 平尾明氏はその著書の中で、熊本県立図書館郷土課から聞き取った話として、「図誌不明。目録にチェックがあることから考えて、前に専門家の調査があっていることは確実。明細が無いことから、図誌不明と判断する。」と記している（平尾1997, 74頁）。

VI. 料紙の欠損

前項で述べたように、緑青焼けによって料紙が欠損、読み取りが困難な文字が複数ある。しかしその大半は残画・他の箇所・文脈からの推定が可能である。詳細は以下の通りである。

- 1) 祇園山わきの注記「本丸方見渡十丁程但本丸西南ノスミ櫓二同[高]」（図1㉔・図25）
←「小山」わきの注記「本丸ヨリ拾五六丁但天守ニ見渡同高」（図1㉑）及び残画より推定した。
- 2) 本光寺西北方向の丘陵付近の記載「む[つ][き][]」（図1㉑・図26）
←第1文字は仮名[む]（[武]）と判断でき、第2文字は残画より、仮名[つ]（[徒]）あるいは仮名[さ]（[佐]）と推定できる。そして第3文字は残画より、仮名[き]（[幾]）あるいは[け]（[遣]）と推定できる。これを「む[つ][き][]」と判じたのは、その文字が記されるあたりに地名「六ツ木」があったからである。第4文字（以下）については欠損が著しく、文字数の推定すらできないが、祇園山・温泉岳・島原山・小山など、絵図の西側には山岳名が比較的大きな文字で記されており、このことから、「むつき山」と記されていたと推定することも可能である。あるいは、景観年代のわずか30年ほど前に島原・天草一揆の舞台となった「むつき村」と記されていたのかもしれない（「Ⅸ. 地名「六ツ木」について」を参照）。
- 3) 城下北の千々石道に関する記載「島原ヨリ千[々石通り]会津江六里…」（図1㉑・図27）
←同じく城下北の別の街道に関する記載、すなわち「…会津ヨリ矢上通り近道長崎江十六里」と記された部分（図1㉑㉒）、地理情報（図32）、記述の整合性、および残画より推定した。

VII. 北西部の地理描写

図34は、「地理院地図」上（グレースケール）に、近世後期の道筋を黒線で示したものである（小道は一部省略）。そして図34のうち、近世後期の道筋のみをグレーラインで示したのが図35、図35のうち、伊能図に示される千々石道を黒線で表したのが図37、さらに杉谷村域を淡いグレーで示したのが図38である（「島原城之図」、「島原郡村図 杉谷村」、「島原郡村図 島原村」、「肥前国高来郡島原御領一円量地図」、「5000 国土基本図」、「米軍空中写真」、「伊能中図 九州北半」、「地理院地図（電子国土Web）」、「長崎県内の主な街道」）。

一方、図36は、「島原城廻之絵図」翻刻図のうち、北西部分のみを（一部の文字情報を除いた上で）示したものである。

図35と図36を比較すると、図35の点A(Ⓐ)B(Ⓑ)C(Ⓒ)D(Ⓓ)E(Ⓔ)F(Ⓕ)が、図36の点a(Ⓐ)b(Ⓑ)c(Ⓒ)d(Ⓓ)e(Ⓔ)f(Ⓕ)とよく対応しているのが分かる。さらに、図36の「杉谷村」という記載は、図38で示した杉谷村域とも矛盾しない。

両図間の差異は、G(Ⓖ)から分岐する2本の道の行き着く先が、C(Ⓒ)・D(Ⓓ)なのか、それとも、D(Ⓓ)・E(Ⓔ)なのか、という点に認められるが、これについては、1) 景観年代と近世後期では、千々石道周辺の道筋が異なっていた、2) 作図者の認知地図と、実際の道筋が異なっていた、などの可能性が指摘できよう。



図34 【北↑】 ※「地理院地図」（グレースケール）に、近世の道筋を黒線で加筆。

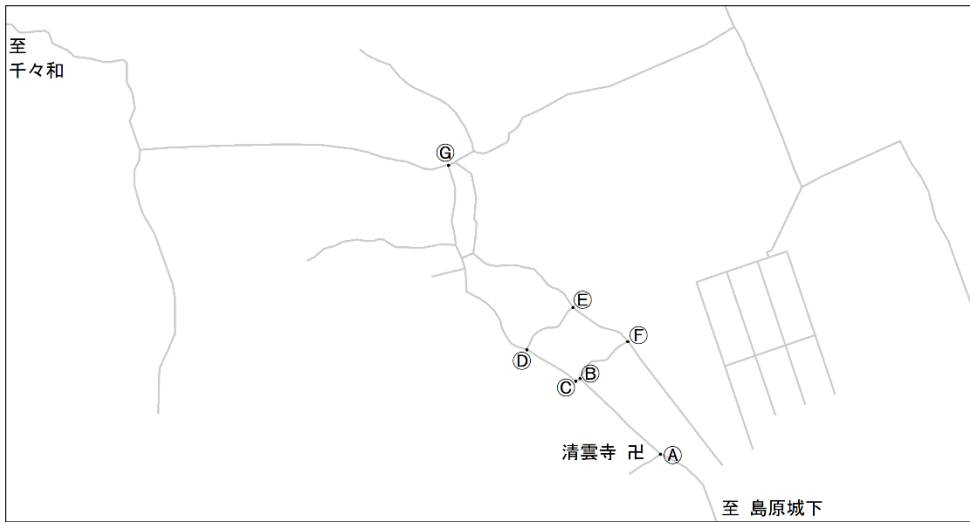


図35 【北↑】

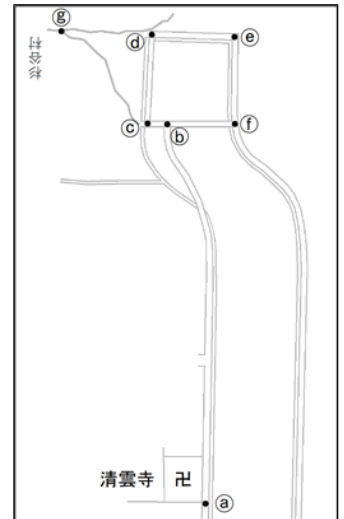


図36 【北↑】



図37 【北↑】 ※黒線は、伊能図に示される千々石道。



図38 【北↑】 ※淡いグレーは杉谷村域。

VIII. 萩原村について

「萩原村」は、慶長・正保・元禄・天保度の各国絵図・郷帳類に見えず、『角川日本地名大辞典』、『日本歴史地名大系』のいずれもが立項しない。しかし以下の史料から、①島原村本村を指し、枝村である今村とともに島原村を構成していた、と考えられる。また、②その中心集落(現在の島原市萩原付近)を指すこともあったようである。

- 1) 島原・天草一揆に関する史料の中には、島原領内の村次を記したものが見られるが、それによると、南目通の村次は、萩原村・今村（此両村は島原村の内也）・中木場村・安德村・深江村・布津村・堂崎村・有家村・有田村・北有馬村・口之津村・加津佐村・北南串山村・小浜村・千々石村となっていた。上記①の傍証となる事実である。萩原村および今村が、国絵図・郷帳に記載される村々と同じように扱われていた点も注目される（「有馬原之城兵乱之記」林 1954b, 121 頁、「嶋原一揆松倉記」国書刊行会 1965, 425 頁; 歴史図書社 1980, 261 頁; 比屋根 1927, 111 頁; 林 1954b, 155 頁、「原之城一揆籠城之事」（藤掛集書）鹿児島県歴史資料センター黎明館 1997, 446 頁）。
- 2) 正保 2(1645)年成立の「肥前国高来郡之内高力撰津守領分図」には、〈島原村 1552.7 石余が、島原村本村 1387 石余、および今村 165.6 石余よりなっていたこと〉が記され、寛延 2(1749)年（推定）の「肥前国高来郡島原城付領郷村図」には、〈島原村 1552.71 石が、萩原名 1374.88 石、および今村名 177.83 石よりなっていたこと〉が記される。このことから、萩原名は島原村本村とほぼ同一地域を指すと考えられる。上記①の傍証となる事実である。
- 3) 「肥前国島原津波之絵図」の島原村域内各所に、「萩原村」あるいは、「椿原 萩原ノ内」「柏野 萩原ノ内」「折橋村 萩原ノ内」などの記載が見られる一方で、同絵図に「島原村」の記載はない。これも上記①の傍証となる。
- 4) 島原・天草一揆に関する史料のなかに、「寛永 14 (1637) 年 10 月 26 日、桜門へ向かう一揆勢が、萩原村より山手にそって兵を進め、鉄炮町に火をかけた」とする史料や、「島原城籠城三日目の寛永 14 年 10 月 29 日、4 人の松倉家中の者が 20 人の鉄砲足軽を率いて城外の様子を探りに出た際、諫早門（北門）を出て、杉谷村⇒鉄炮町⇒萩原村⇒今村ノ境⇒町屋ノ焼跡⇒浜辺⇒鷹島⇒長浜⇒五社⇒猫塚辺ノ松原を経て、再び諫早門から城内に入った」とする史料がある（林 1954b, 867, 871 頁）。上記②の傍証となる記事である。
- 5) 島原藩日記の寛文 11(1671)年 7 月 4 日条に、「萩原村の者が、雨乞いの礼躍りを五社で行った。そのため歩行目付衆・下横目を遣わした」という内容の記事がみえる（島原市教育委員会 2008, 46 頁）。また天和 2(1682)年 12 月 1 日条には、「萩原村 2 名および千々石村の 2 名へ、精を出して鉄を焼いたことにより褒美を与える」とする記事もある（島原市教育委員会 2010, 89 頁）。「萩原村」という村名が藩の公式記録で使用されていた例である。

6) 島原大變関連史料のうち「見聞集」には、「安徳村三会村萩原村半分沖田村流失」と記される（東京大学地震研究所 1989, 244 頁）。また「半日閑話」には、「浜手の方に萩原村という村がある。ここに寺が有るが、この寺は城主の菩提所であり、多くの石塔があった。」と記される（『古事類苑』地部 洋巻 第3巻 885 頁）。「萩原村」という村名が近世後期においても使用されていた例である。

Ⅷ. 地名「六ツ木」について

近世初頭、六ツ木は三会村の一部、のちに杉谷村が三会村から分村してからは杉谷村の一部であった。国絵図・郷帳類に記されないものの、「六ツ木」という地名もまた史料に散見される。

島原・天草一揆に関連する史料のうち「佐野弥七左衛門覚書」には、寛永 14(1637)年 10 月 27 日未明、六ツ木村に陣を構えた一揆勢の中から、一人の女が島原城までやってきて、一揆方の評議の内容を知らせたことや、六ツ木村に陣をかまえていた一揆勢が、千本木とよばれる山の麓へ移ったこと、そののち、一揆勢が 10 月 30 日まで、六ツ木村、三会村、千本木の三ヶ所に布陣したことが記される（林 1954b, 71-73 頁, なお 495 頁を参照）。

さらに、島原大變関連の史料をみると、「両肥大變録」に、「溶岩流が下ってきて、六ツ木村・千本木村・杉谷村・三会村あたりまで危険が迫っているようだ」と記されるほか（東京大学地震研究所 1984, 150 頁）、六ツ木村を図示する島原大變関連図が、筆者が確認しただけで 3 点存在する（歴史地理学会 2001, 110-111 頁、北原 1998, 95 頁）。「村」を付さない「六ツ木」地名や、「六ツ木山」という山岳名はさらに多くの史料に見え、「六ツ木」地名が一般に使用されていたことが分かる。

現在、長崎県島原市に「六ツ木町（むつぎまち）」という地名がある。そして、それより若干狭い地域を字「六ツ木」・字「六ツ木山」・字「六ツ木上」・字「六ツ木前」・字「六ツ木後」が占める。図 39 は、その 5 つの字を近世「六ツ木村」の範囲と推定、図示したものである。



図 39 近世「六ツ木村」の範囲（推定）

8. 参考文献・史料・URL

- 愛野町編『愛野町郷土誌』（愛野町、1983年）。
- 宇土智恵『島原城の復元的研究』（私家版、2006年度）。
- 学習研究社『歴史群像シリーズ よみがえる日本の城 21 肥前名護屋城』（学習研究社、2005年）。
- 鹿児島県歴史資料センター黎明館編『鹿児島県史料 旧記雑録拾遺伊地知季安著作史料集一』（鹿児島県、1997年）。
- 北原糸子「災害絵図研究試論」『国立歴史民俗博物館研究報告 第81集』（国立歴史民俗博物館、1998年）。
- 郷土文化研究所編『熊本県史料集成別冊第一集 熊本県古地図目録』（日本談義社、1954年）。
- 草野正一『長崎県の小字地名総覧 ー主な小字地図と小字地名ー』（私家版、1999年）。
- 国書刊行会編『続々群書類従』第四（続群書類従完成会、1965年）。
- 国書刊行会編『続々群書類従』第十二（続群書類従完成会、1970年）。
- 島原市教育委員会編『島原鉄砲町 島原市鉄砲町伝統的建造物群保存対策調査報告書』（島原市教育委員会、2009年）。
- 島原市教育委員会編『島原藩日記 巻一』（島原市教育委員会、2008年）。
- 島原市教育委員会編『島原藩日記 巻二』（島原市教育委員会、2010年）。
- 島原市教育委員会編『島原藩日記 巻三』（島原市教育委員会、2011年）。
- 島原市教育委員会編『島原藩日記 巻四』（島原市教育委員会、2012年）。
- 島原市教育委員会編『島原藩日記 巻五』（島原市教育委員会、2013年）。
- 島原市教育委員会編『島原藩日記 巻六』（島原市教育委員会、2014年）。
- 島原市教育委員会編『島原藩日記 巻七』（島原市教育委員会、2015年）。
- 島原市教育委員会編『島原藩日記 巻八』（島原市教育委員会、2017年）。
- 島原市教育委員会編『島原市文化財調査報告書』第16集 森岳城跡石垣調査報告書（島原市教育委員会、2016年）。
- 白峰旬「肥前国島原城修補許可の老中奉書について-島原市本光寺所蔵史料の史料調査より-」『別府大学大学院紀要』第7号（別府大学大学院文学研究科、2005年）。
- 東京大学地震研究所『新収 日本地震史料 第四巻 別巻』（東京大学地震研究所、1984年）。
- 東京大学地震研究所『新収 日本地震史料 補遺 別巻』（東京大学地震研究所、1989年）。
- 西田博『肥前浜城と島原城下町の復元的考察』私家版、2017年 a、九州大学学術情報レポジトリにて公開）。
- 西田博『島原城下絵図翻刻稿①「肥前国島原之城」』（私家版、2017年 b）。
- 西田博『島原城下絵図翻刻稿②「筑前筑後肥前肥後探索書」』（私家版、2018年 a）。
- 西田博『島原城下絵図翻刻稿③「肥前国高来郡島原城図」ー付 五社宮・三社宮についてー』（私家版、2018年 b）。
- 西田博『島原城下絵図翻刻稿④「島原城下図」』（私家版、2019年 a）。
- 西田博『島原城下絵図翻刻稿⑤「肥前国嶋原城図」ー付 寛文8年島原城請取関係史料ー』（私家版、2019年 b）。
- 西田博『島原城下絵図翻刻稿⑥「肥前島原之城図」』（私家版、2019年 c）。
- 西田博『島原城下絵図翻刻稿⑦「島原森岳城絵図」』（私家版、2020年 a）。
- 西田博『島原城下絵図翻刻稿⑧「本朝城絵図」』（私家版、2020年 b）。
- 日本城郭協会編『図説 日本城郭史』（新人物往来社、1984年）。
- 林銚吉編『島原半島史』上巻（長崎県南高来郡市教育会、1954年 a）。
- 林銚吉編『島原半島史』中巻（長崎県南高来郡市教育会、1954年 b）。
- 林銚吉編『島原半島史』下巻（長崎県南高来郡市教育会、1954年 c）。
- 福知山市史編さん委員会『福知山市史 史料編一』（福知山市役所、1978年）。

比屋根安定編『吉利支丹文庫 第三輯 島原天草日記 他四篇』（警醒社書店、1927年）。
平尾明『島原市保有寛政四年島原大變関連古図集（パソコン出力試版 Ver1.0）』（島原市役所災害復興課、1997年）。
増田安次『杉谷村と崇台寺—地名に刻まれた杉谷村の歴史と寺紋・六文銭の岳嶋山崇台寺』（私家版、1985年）。
安室知「水辺の生活環境史 汽水域の漁撈-涸沼のスマキ-」『非文字資料研究』（神奈川大学日本常民文化研究所 非文字資料研究センター、2012年）。
歴史地理学会編『歴史地理学』第43巻1号（通巻第202号）（歴史地理学会、2001年）。
歴史図書社『天草騒動 島原天草軍記集』（歴史図書社、1980年）。
若林芳樹・鈴木晃志郎「地図と空間認知をめぐる理論的・応用的諸問題」『地図』Vol. 41 No. 4（日本国際地図学会、2003年）。

『5000 国土基本図』（1-KG-70, 1979）。

『島原市街図』20・25（島原市、2003年測図、2006年一部修正）。

「地理院地図（電子国土 Web）」（https://maps.gsi.go.jp/#17/32.801973/130.362319/&base=std&base_grayscale=1&ls=std%200.73&disp=1&vs=c0j0h0k0i0u0t0z0r0s0m0f1）。

「米軍空中写真」（USAR154-103, 1947）。

「伊能中図 九州北半」（陸軍参謀局、年不詳）。

「島原郡村図 島原村」（長崎歴史文化博物館蔵、オリジナル番号 3 300 4）。

「島原郡村図 杉谷村」（長崎歴史文化博物館蔵、オリジナル番号 3 300 40）。

「島原城之図」（本光寺常盤歴史資料館蔵、本光寺文書 788 号）。※島原市教育委員会（2016）66 頁に写真掲載。

「島原藩士屋敷図」（島原図書館松平文庫）。

「肥前国島原津波之絵図」（熊本大学図書館 永青文庫 8, 4, 丙 11-1）。

「肥前国高来郡島原御領一円量地図」（島原図書館蔵）。

「肥前国高来郡島原城付領郷村図」（島原図書館松平文庫 72-80-2）。

「肥前国高来郡之内高力撰津守領分図」（長崎歴史文化博物館 3 110-1）。

「森岳城図」（島原図書館松平文庫 絵図 3 4）。

「万覚書」（長崎歴史文化博物館蔵、14K/4114/8, 14K/4114/9）。

「領分付 肥前国郷帳」（武雄鍋島家資料 G4、武雄市歴史資料館蔵）。

『古事類苑 地部 三』 http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/G0035940kjr

<http://www.library.pref.kumamoto.jp/DigitalArchives/ezu/higohanezu/Takoku/chie352.pdf> ※「島原城廻之絵図」画像データを公開。

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-16K16342/16K16342seika.pdf> ※緑青焼けに関する研究。

<https://geolog.mydns.jp/www.geocities.co.jp/fb4wing/> ※「長崎県内の主な街道」

9. あとがき

2017年6月、『肥前浜城と島原城下町の復元的考察』という小文を発表したが（九州大学学術情報レポジトリに登録）、その稿を進めるなかで島原城下絵図について若干の知見を得ることができた。その知見、あるいはその後に得られた知見をまとめたのがこの「島原城下絵図翻刻稿」シリーズである。

今回、絵図の調査・撮影、写真掲載許諾手続きにあたり、熊本県立図書館情報支援課第二班の方々、特に森山氏には大変お世話になった。この場を借りてお礼を申し上げたい。

タイトルに「稿」とあるように、これはあくまで未刊稿である。特に、彩色・顔料・料紙などについては考察を保留している。無知による錯誤・誤謬も多々あるかと思う。先学諸賢のご批判・ご叱正を得て、「稿」の一文字を削除できれば、と切に願っている。

島原城下絵図翻刻稿シリーズ

- ①「肥前国島原之城」（長崎歴史文化博物館蔵）
- ②「筑前筑後肥前肥後探索書」（長崎歴史文化博物館蔵・東京大学史料編纂所蔵）
- ③「肥前国高来郡島原城図」一付 五社宮・三社宮について—（佐賀県立図書館蔵）
- ④「島原城下図」（本光寺常盤歴史資料館蔵）
- ⑤「肥前国嶋原城図」— 付 寛文8年島原城請取関係史料 —（東京大学史料編纂所蔵）
- ⑥「肥前島原之城図」（長崎歴史文化博物館蔵）
- ⑦「島原森岳城絵図」（東京大学史料編纂所蔵）
- ⑧「本朝城絵図」（東京大学史料編纂所蔵）
- ⑨「島原城廻之絵図」（熊本県立図書館蔵）

書名：島原城下絵図翻刻稿⑨「島原城廻之絵図」

書名読み：しまばらじょうかえずほんこくこう・きゅう・しまばらじょうまわりのえず

著者：西田 博（にしだ・ひろし）

〒854-0074 長崎県諫早市山川町 18-4

発行：2021年8月16日